11* Amblyiulus sp. ? Niijima I.

Among the above no. 5 and no. 9 have been recorded by the late Dr. K. W. Verhoeff while no. 8 was identified basing on two males brought back from Oshima Island by Mr. Shinohara. Asterisks are given to species new to the fauna of this area.

サソリ研究ノート*

高島春雄
財團法人山階鳥類研究所

1 田中隆行氏を憶う

私が戰時中，東京文理大動物學教室でサソリの勉强をやつていた時，東大理學部動物學教室に田中隆行という大學を出て間もない御方がいて，陸軍の委託のような形でサソリの毒性を中心にサソリ綜說というような物を纒めることになり私に敬意を表しにやつて來られた。その頃三井高孟氏が毒蛇を受持ち田中氏がサソリを擔當することになつたらしい。田中氏は頭腦明晰な上に學問熱心で，諸文献を涉獵してその綜說の稿を進めておられた。私は標本を分けて上げたり文献をお貸ししたりしているうち，前から兆のあつたらしい呼吸器疾患が昂じて氏は病床の人となつた。今私の手許には同氏からの昭和18年6月23日附の書信が殘つているがそれには「体が惡いために一日の中で仕事の出來る時間と云つては一時間もない位で全く弱つて居ります」とある。まさかと思つてい

* つまらぬことであつても書き殘して後日の備忘とするのが自他の爲であるように思うので色々の事柄をこの題下に綴る。

たのに同年9月30日午前11時6分永眠という黒枠の通知を頂いて愕き且つ悲しんだ。幸にもその概説は部厚な原稿として殘つた。この儘埋もれるのは勿体ないと氏の學友山下博三氏が私の所に持つて來られ，私は山下氏の友情を尊く思い通讀して多少補筆したりしてお返しした。これが印刷されることは大いに學界を裨益するがらその日を待ちあぐんでいたがその後色々と狀況の變化に左右されて（印刷事情の悪化）結局「科學南洋」の第16號だかに載ることになりそれも途中で兵火の爲原稿燒失·控えもないことゝてこの勞作は永遠に埋もれてしまつた。

この頃不圖田中氏を憶い出し懐しさに堪えずその御冥福を祈つた。

2 ミクロネシアの蝎

C. Fr Roewer が1943年に Urodacus marianus というのを報ずるまではミクロネシアのサソリは2種きりで，其等は何れもいわゆる Indo-Australian Region に弘く分布しミクロネシアの動物相に何等の特殊性を與えるものではない。2種共ミクロネシアの全群島に發見されるようで，それも元來はいなかつたのが後に人爲的に移されその儘居つきになつたのかも知れない。marianus を加えた3種は次のように識別される。

A 胸板は顯著な5角形

B 側眼は各側2箇．櫛狀器齒數は14枚 ………………………………… ………U. marianus

BB 側眼は各側3箇．櫛狀器齒數は4～8枚（多くは6枚）………………ヤエヤマサソリ

AA 胸板は前方は3角形を成して狹まる．側眼は各側3箇．櫛狀器齒數は17～19枚（多くは18枚）…………………………………………………………………………マダラサソリ

私の直接調査するを得たミクロネシア產サソリは松井喜三，關口晃一，松下傳吾，高橋敬三，羽根田彌太，高桑良興諸氏の御好意によるものでマダラサソリ6個体，ヤエヤマサソリ28個体である。もつと多數の標本を調べたいと思う。

3 ジャワ產サソリの追記

1951年7月5日山崎輝男氏の御厚志により東大農學部害蟲學研究室に保存されるサソリ、サソリモドキの標本1函を拜借して調べることが出來た。同氏に謝意を捧げる。標本はどちらも乾品で昆蟲標本の如く針で固定してある。前回農業技術研究所から拜借したのと同じアオサソリ Heterometrus cyaneus (C. L. Koch) で私の檢するを得た6頭目のものである。乾固された姿は中々宜しい。

色彩は上面は一様に帶赤黑色でチャグロサソリと全く同じで青色の光澤は全く失せていた。測定値は乾固品のこと故正確ではないが大体背甲長14，前腹長25.5，後腹長51，觸鬚轉節長5，同腿節長13.5，同脛節長16，同掌長13，同掌幅14.5，同指長16（以上單位 mm）である。本個体は成雄であるが，標本が1箇きりで他に比較すべき個体がなかつたり，このように乾固して性扉や櫛狀器は癒着して調査しようもない時に觸鬚腿節に於ける二次性徵は誠に便利で，これに氣づいた Giltay の慧眼に敬意を表さねばならぬ。アオサソリはジャワに普通のもので他はボルネオ，スマトラにも產することになつているが日本に齎された標本は先ずジャワ產と看做して差支えないようである。この標本の來由に關しては全く判らないそうである。同じ函に收まつているサソリモドキは之又農業技術研究所から借用の標本に同じくジャワサソリモドキ Thelyphonus caudatus (Linné) の♀で私が檢するを得たこの種類の第5番目の標本である。本種に就いては「ジャワのサソリモドキ」「ジャワ產サソリの調査」に誌して置いたし別に新知見はない。ジャワの特產ではないがジャワに普通の種類である。

このような無緣佛に回向したいのが私の念願である。所在御存じの御方はどうか御通報を乞う。

4 ボルネオの蝎

ボルネオのサソリは文献に徵するに7屬12種程あるが私が自身で檢した標本はチャグロサソリだけである。今私の手許にあるのは

1) “蘭領”ボルネオ產♀の乾品。これは本誌 vol. vi, no. 1 の表紙に寫眞を出した。

2) ボルネオ產と推定される1♂ 1♀の乾品（始めは2♂♂ 2♀♀あつたが今は雌雄各1体が殘つている）。寫眞は本誌 vol. vii, no. 1 , p. 29 に出してある。

3) B. N. Borneo の Tawau で1938年3月採集された♀乾品。

等で他所ので調査させて貰つたのは

4) “ボルネオ產という”標本でその時國立科學博物館が預つていたもの。♂♀の乾品。

5) ボルネオの Elopura 產で東大理動物學教室所藏，♂の液浸。

6) “英領北ボルネオ”產で東京文理大動物學教室所藏，♀の液浸。

7) ボルネオ產で大部分は Tawao で採れたもの。1体だけはボルネオのどこ產であるか不明だが合せて2♂♂5♀♀，當時東京高師附屬中學校生物標本室所藏，液浸，昭和20年空襲に燒亡。

以上合せて6♂♂11♀♀に過ぎない。ボルネオ產の7屬12種というのは次の通りで拙稿「東亞地域の全蠍目」の檢索表を參照されゝば屬の識別までは出來る。

1 Lychas flavimanus (Thorell, 1888)
2 L. shelfordi (Borelli, 1904) ボルネオだけ
3 Uroplectes occidentalis Simon, 1876
4 Isometrus europaeus (Linné, 1758) マダラサソリ
5 Heterometrus longimanus longimanus (Herbst, 1800) チャグロサソリ
6 H. cyaneus (C. L. Koch, 1836) アオサソリ ボルネオでは東北部にだけ
7 Liocheles australasiae (Fabricius, 1775) ヤエヤマサソリ
8 L. caudicula (L. Koch, 1877) ニイムラサソリ 亞種に分けるのならボルネオからハルマヘラ，セレベスに產するのは L. c. weberi (Pocock, 1893) である
9 Parascorpiops montana Banks, 1928 ボルネオにだけ
10 Chaerilus celebensis Pocock, 1893 セレベスクシオレサソリ
11 C. variegatus Simon, 1877 ミイツクシオレサソリ Kraepelin (1899) は "Borneo ?" としている
12 C. laevimanus Pocock, 1899

4, 5, 6, 7, 8 はボルネオ以外の地域で採れたもので調査したことがある。

5 不思議なサソリ

1951年9月中旬愛媛大學文理學部森川國康氏より1頭のサソリ標本の送附を受けた。御來信に據ると7月下旬の調査旅行に愛媛縣南宇和郡城邊（ジョウヘン）町に到りそこの城邊小學校の標本中にサソリが4体程あつた；それは大正12年（？）城邊で採れたものということになつており半信半疑なのでその內の1頭を送る；査定して欲しいとの御趣旨であつた。早速拜見したところキョクトウサソリの♂で別に變つた種類ではなく，このサソリが南宇和郡あたりに自生したり或は曾て移入されてそれが野生化したりしたことは信ぜられぬから，恐らく何かの記憶ちがいで，本當は滿洲か北支から齎されたものなのであろう。森川氏にお手數を謝す。

6 天のサソリ

大小十數の星が大きなS字状を形づくり夏の南の空で最も立派な星座といわれるのにサソリ座（スコルピオ座）がある。この星座に皮肉をつけ着物でも着せるとサソリの姿に見えるというのでサソリ座の名が與えられた。星を連ねたのを骨骼にでも見立てゝサソリの繪が輪廓に畫かれているのは御存じの通りであるが，その繪では尾状の後腹部が7節（本物なら6節）になつている。偶々野尻抱影氏の「星座十二ヶ月」（岩崎書店刊）を手に入れて同先生に異議を申し入れたところ「前にも學者からそういう注意を受けたことがある。念の爲，今，古代からの星圖を調べたところ，7つどころか8つある圖さえあり，星の數から事實を無視しているのだと思つた。やはり星座で大熊や小熊の尾が長いのも同じである」との御返事を頂いた。歩脚の數が合つているのはまだしも幸である。

7 「蝎を飼う」の續篇

1951年8月29日計らずも入手し爾來飼育して來たマダラサソリ（委細は別稿「蝎を飼う」に出してある）は食餌を一向に攝ろうとせず，それが主因らしいが9月27日動かなくなつた。丁度30日間私の所にいた譯である。生時の体色を記載して置こう。背甲及び前腹は汚黄色の地に不規則な黑褐色斑がある。後腹部はやゝ淡い汚黄色で節により大いに黑染されているのもある。最後節（第6節）は背甲などと似た色で不規則な黑褐斑がある。毒針は橙赤色を帯びる。觸鬚や歩脚は背甲や前腹部と同色で前方の節は概して黑一色，觸鬚では鉗を成す第5節，第6節共全く黑染されている。背甲の腹面に當る部分は概してやゝ清々しい感じのする淡黄色。この個体は♂であるが♀もほぼ同様である。

1951年10月19日松下傳吾氏から御送附を受けた函の中にマダラサソリが4匹もいた。これはハワイから立川空軍基地に送られて來た資材中に發見されたものであるという。松下氏の御宅では生きていたが私が頂いた時には絶命していたのは殘念である。資材は鐵板でそれらを積み重ねてあつた間の僅かの間隙中に身を潜めていた。横濱に荷揚して1箇月放置され，それを立川に運んでほぐした時生きた姿で現れた。それを松下氏が知友から貰い受けたのだという。測定を次に掲げる。

標本番號	性	背甲長	前腹部長	左二つの合長 即ち胴長	後腹部長(尾長)	尾長/胴長 (尾率)	觸鬚長	櫛狀器齒數
1	♂	4.5	12	16.5	34.5	2.09	25	右18 左18
2	♀	5	17.5	22.5	27	1.2	20	右19 左17
3	♂	4	11	15	25.5	1.7	17	右19 左20
4	♀	5	15	20	26.5	1.3	18	右19 左18
5	♀	4	11	15	22	1.47	17.5	右17 左18

10月29日同じ來歴の1匹を更に松下氏の御好意により入手することが出來た。この分布の汎い死太いサソリは恐らく日本の他地にも同じような機會に運ばれ，上陸はしているらしいが土着することは先ず不可能と考えられる。今度のはまだ成長の餘地ある♀で元氣なので飼育していたが13日目の11月8日に斃れたのは惜しかつた。手厚く葬る代りに各部の測定を行い液浸標本として永く保存することにした。前表中の5がそれである。

サソリが密航を企てるのは上記の例からも判るが，戰前昭和13年6月11日神戸入港の三井船舶部傭船乾隆丸の中にサソリが見つかり一騒ぎになつたことは，當時東京の或る新聞で見つけその全文を本誌第3巻第3號第127頁に轉載して置いた。それにはまだ同類の多數いるらしい船倉內の鐵屑にピクリン酸をかけて退治しているとあつた。近頃大阪の植村茂氏から當時大阪朝日新聞に出た記事の切抜を見せて頂いたが，大袈裟の報道ぶりは何れ劣らずで非常識この上もないが注目すべきは之等不逞の輩の總數が記されていることである。この貨物船はバンコツクから鉄屑を載せて來たが神戸入港の時鐵屑の間からサソリが匐い出して人々を驚かせたのである。「のそのそ現れ出たサソリ八匹さらにそれに酷似のサソリモドキ八十匹がウヂヤウヂヤしてゐるのに倉岡船長以下びつくり仰天」とあるからサソリ（恐らくマダラサソリであつたろう）の他にサソリモドキの1種が多數替んでいたものらしい。サソリは兎も角サソリモドキはどうしては入り込んだのであろう。たつた8匹しか見つからぬのに「さそりの大量侵入には日本でも全くはじめてのことだし上陸でもされたら猛烈な蕃殖力で內地を席卷する懸念があるので」云々は輕率も甚だしい書き方である。

8　サソリを表した郵便切手

1951年12月東京教育大學學生河村重行氏からサソリを表してあるオーストリ

アの郵便切手1枚を頂いた。12グロシェンので濃綠色の地に左肩の所にサソリを白く浮き出させてある。これは恐ちくクロヒメサソリ Euscorpius carpathicus (Linné, 1767) であると想われる。廓大して視ると前腹部や後腹部の關節數も正しく描かれていることを知る。我々にはお馴染のヤエヤマサソリに一寸似た姿であるが，私はこの種類は國立科學博物館に陳列されてある液浸の1頭を見たきりで自身で調査したことはない。コーカサスからスペインにかけて分布しオーストリアにも產するサソリである。動物切手でも權威者である江崎悌三教授にこの切手の由來を伺つたところ「これは1937年のクリスマス用として發行されたもので綠色（12グロシェン）と赤（24グロシェン）の2種があり前者のほうが少いが，今でもどちらも容易に入手出來る。オーストリがナチスドイツに合併される直前に出たもので大戰前のオーストリの最後の切手で勿論現行ではない。中央にバラの花を，その兩側に黃道の星座十二宮を描いたものでサソリは勿論蝎座を示している。このサソリの畫は實によく出來ていると思う。私の知る限りサソリのついている唯一の切手のようである」と教えて頂いた。同博士の博識に更めて敬意を表する次第。

第1圖　サソリを表したオーストリアの郵便切手

9　雜　　俎

1951年12月16日本昆蟲學會關東支部例會が開かれその席上國立博物館所藏栗本瑞見の「栗氏蟲譜」(寫本)をよく覽ることが出來た。その機會を與えられた奧村定一氏に謝意を捧げる。この本に出ているサソリに關しては私は本誌 vol. viii, no. 8 (1943) に紹介した。面白いのは北海道產ザリガニの幼生をこのサソリの仲間のように著者が考えたことである。圖示されたザリガニの幼仔はサソリの幼仔によく似た姿に描かれている。同じ席で埼玉縣の淸水古壽氏から同定を求められたのは同氏が1947年1月14日南部マレー東海岸 Endou で採集されたもので，他の昆蟲標本などと共に昆蟲標本箱に收められた乾燥標本であつた。硝子蓋の上から窺つた限りに於てこれはチャグロサソリ2♀♀である。

10　稀代の大サソリ

挾間文一氏（戰前は京城醫專教授，醫學博士，今は故人）が昭和18年東京の力書房から出された「自然科學南と北」と題する科學隨筆や紀行を蒐めた本の199頁に「蝎の研究家としても有名な北京大學醫學院長鮑博士の話では，支那の蝎はエジプトやイタリヤのものに比し毒力が弱く，蝎によつて死んだ例を聞いたことがないといつてゐた。しかし濕地には到る所にゐるので，勢ひ蝎刺症を治療する機會が非常に多いといふことである。普通に見る蝎は，全長六センチ乃至七センチぐらゐのものであるが，嘗て濟南事件の際破壞された山東省督辨公署の修理中，七十センチにも達する巨大な蝎を捕つたといふ。ここに示した寫眞の蝎が即ちそれである」とあり一つ前の198頁にその寫眞が出ている。この寫眞が70cmの原寸でないこと勿論である。何度も私が書いたように世界最大のサソリというのは西アフリカやスダン産の大王サソリ Pandinus imperator C. L. Koch で体長17.5cmに達するといわれる。これ以上の尤物は今日まで學界に知られていない。「七十センチ」などとは凡そ常識外れでそのような個体の見つかろう筈がない。示された寫眞はキョクトウサソリの♀であるが，實は偶然にも私はこれと同じ寫眞を戰後昭和22年細井操氏から頂いて持つていた。氏の御教示によると氏の知人が昭和15年頃北京に出征駐屯していて　氏のために購入し送つて來たものだという。恐らくその寫眞はお土産として賣つており，あとから胸に一物といつた人が無理に70cmの大サソリに仕立てたものであろう。著者挾間博士が他界された今日，この正体を確かめようもないが動亂の時には珍動物が現れるものと見える（實例省略)。

11　皇居內生物學御研究所所藏サソリ及びサソリモドキ類標本目錄

1952年1月24日動物分類學會會員有志に皇居內にある生物學御研究所の拜觀を許され，私もそれに加わつて見學したところ階下の大きい標本室の戶棚の中にサソリやサソリモドキの液浸標本が幾罎かあるのを知り，他日何とかしてこれらを拜見調査させて頂きたいものと念じていた。然るに6月2日御研究所の服部廣太郎博士，その他同所職員の方々の御厚志によりこれらを親しく拜見，調査する好機に惠まれたのは私の深く感謝したところである。拜見出來た標本の目錄を次に揭げるに當り御研究所を主宰せられる天皇陛下に衷心よりの敬意を捧げ併せてお世話下さつた職員の御方に謝意を表明するものである。何れも液

浸であるが蓋をとつて取り出すことは御遠慮せねばならぬので，調査に不便があり性別を知ることの出來ない場合があつた。調査した種類は脚鬚目1種（サソリモドキ）．蝎目4種（キョクトウサソリ，ヒノモトサソリ，マダラサソリ，カネグロサソリ）で蠻番號（Arachnida 1,…… という風になつている）の順序に次に掲げる。

A. 2　サソリモドキ Typopeltis stimpsonii (Wood) ♀♀　鹿兒島縣大島郡十島村平島　昭和7年8月1日　永井龜彦氏採集

A. 3　同上　♀　哺育していた幼仔十數匹も一緒に保存されてある　產地その他總べて A. 2 に同じ

A. 4　同上　♂　鹿兒島縣川邊郡笠砂村　昭和10年8月　笠砂尋常高等小學校生徒採集

A. 5　キョクトウサソリ Buthus martensii Karsch　♀及び幼生2　北京　昭和11年

A. 6　同上　♂　灤縣駐屯隊兵舍　昭和11年8月20日

A. 7　同上　幼生　產地同上　昭和11年8月10日

A. 8　サソリモドキ　♀　海南島楡林駐屯所附近　昭和14年3月

A. 9　ヒノモトサソリ Lychas mucronatus (Fabricius)　2個体　海南島　昭和14年3月

A. 10　同上　♀　海南島　昭和14年3月　山添武官傳献

A. 11　同上　3個体　海南島楡林駐屯所附近　昭和14年3月　山添武官傳献

A. 12　キョクトウサソリ　♀♀　關東州旅順模珠礁　昭和14年8月25日

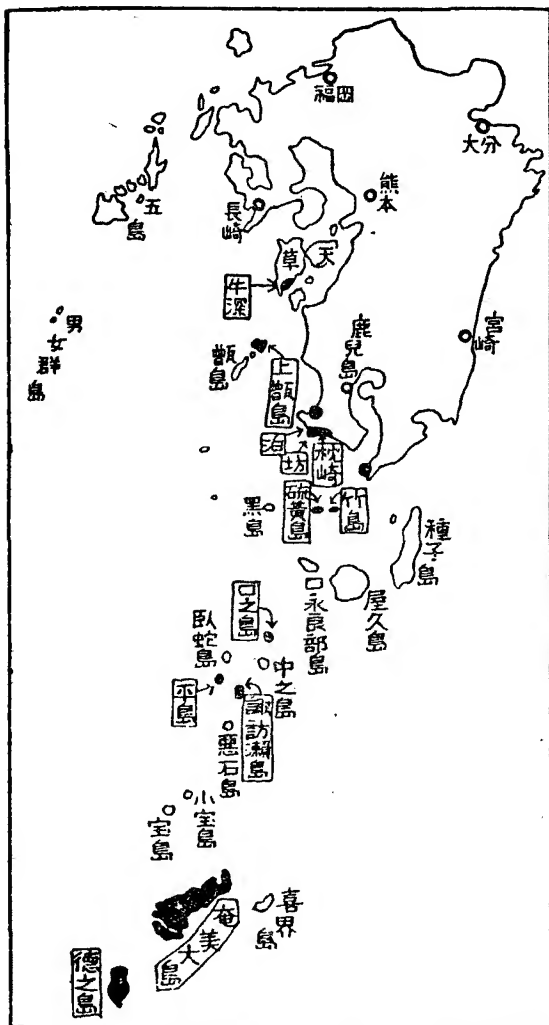
A. 14　カネグロサソリ Heterometrus longimanus petersii (Thorell) ♀　佛領印度支那ホナンテン附近　昭和16年8月10日　大柿部隊採集

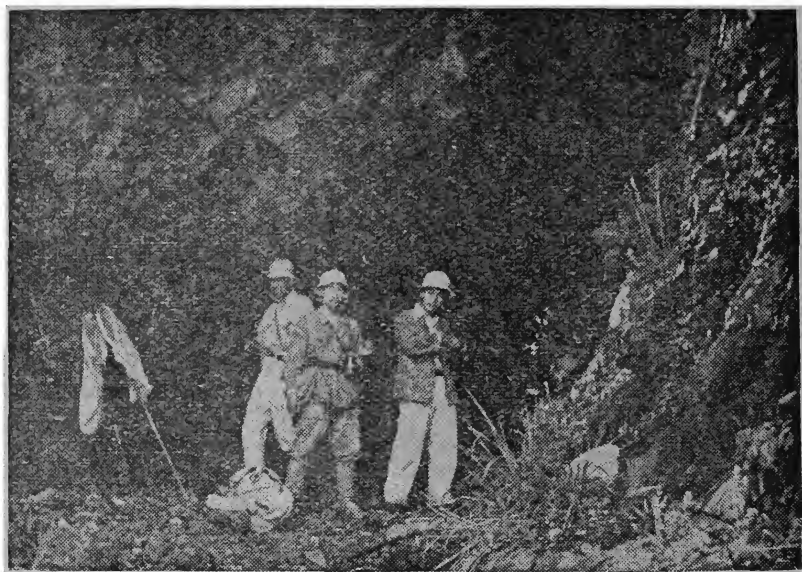
A. 16　マダラサソリ Isometrus europaeus (Linné)　♀　南洋サイパン島

12　サソリモドキの新產地

サソリではないがこの報告の最後に附錄としてサソリモドキのことを記す。この奇怪な姿の arachnid の本邦內に於ける分布狀況に關しては本誌 vol. v, no, 2 (1940) に揭出の江崎教授の「サソリモドキの分布」が最も詳しいものである。然るに上記生物學御研究所に藏される A. 4 (♂1体) という標本は鹿兒島縣川

邊郡笠砂村で笠砂尋常高等小學校生徒の採集したもので，同じ薩摩半島川邊郡でも既知の産地より更に北に當る。1新産地である（黑丸にて示す)。

第2圖　サソリモドキの分布略圖　黑い部分（地名に枠を附す）は産地を示す．江崎教授原圖に新産地2地点を加う（黑丸にて示す）

次に1952年5月下旬江崎悌三，朝比奈正二郎，加納六郎，長谷川仁，中根猛彦，平島義宏諸氏は大隅半島南部に主として昆蟲採集の旅を試み色々と珍らしい種類を採獲されたが遂にサソリモドキを發見，5月30日成幼共11匹程の採集に成功（最初に見つけたのは中根氏であるという)，江崎・朝比奈・加納3氏は夫々生かして持ち歸られた。私は江崎教授からその内4匹を頂くことが出來たがこれらは大隅半島に於ける最初の採集例で（圖に黑丸を以て示す)，これを生かした儘わざわざ東京までお持ち下さつた江崎教授の御親切に深き謝意を表明する次第である。同氏の談に據れば大隅半島でもほゞ南端の肝屬郡佐多町尾波瀬だけで見つかり他所では決して見ることがなかつた；そこの海岸からごく

近い岩窟様の所で見つけた山。4匹の内2♂♂は生きていたので暫く飼育することが出來た。生きたのは私には始めてであつたので大いに愉快であつた。4匹の内3匹は成熟した♂でもう1匹は幼生で♀と考えられる。之等のうち缺損の少い1♂につき測定したら体長36，背甲長16，背甲幅10，腹部長20，腹部幅4，尾狀附屬物長44+x（29節まで算えられるがそれから先は折損），第1步脚腿節長12，同膝脛節長16，同蹠節長14，同跗節長12であつた。生時は成体では

第3圖　尾波瀨の洞窟で遂にサソリモドキを見つけた一行．中央は最初の採集者中根助敎授．左手に1匹を持つての記念撮影．その左方は江崎敎授．右は平島義宏氏．（加納六郎博士撮影寄贈）

背面觀は誠に黑い。尾狀附屬物のみ赤黑く第1步脚跗節も多少赤味がある。永く液浸にした標本では背面も腹面も著しく栗赤色を呈するのである。朝比奈氏の持ち歸られたのは3匹が斃れ2匹(幼生)を飼育中でお手の物のチャバネゴキブリを與えておられる。加納氏が飼育しておられたのは6月12日に貰い受けたが御芳志に深く御禮申し上げる。